

郡山で合唱クラスター発生

8月22日、郡山市で合唱練習と関連した新型コロナウイルスのクラスターが確認されました。最初に確認されたのは、郡山市の20代男子大学生でした。この学生は18日に大学内の施設を利用していました。

郡山市は18日から20日までに、感染が確認された市内在住5人の濃厚接触者合わせて11人がPCR検査の結果、陰性だったと発表しています。

現在、市保健所は「合唱練習の参加者は全員マスクやフェースシールドをし、間隔を2メートルあけ換気をして練習していたという。どのような行動をしたかを詳しく聞いている」という段階です。

我われが知りたいのは、どのような状況で感染が起きたのか、合唱の練習だけでなくその前後はどうだったのか、全日本合唱連盟のガイドラインはどのように扱われていたのか、などの事実関係です。実際に何が起きていたのか分からない状況の中で憶測だけで心配しても仕方ありません。

どこで、いつ起きてもおかしくない

FacebookはじめとするSNSでも多くの方々が意見を述べています。中でもFacebook公開サイト「**ポストコロナの合唱活動を考えよう**」を主宰している、千葉敏行さんは次のように冷静な対応を求めています。

全国でもっとも合唱に対する意識も高く、コロナ対策もしっかりと行われていたことと推察されます。どんなに対策を講じてみてもリスクはゼロにはなりません。ウィズコロナにリアル合唱練習を行うというのは、このようなことが起きると覚悟がないといけなのではないかと考えます。

ウイルスを誰かが持ち込んでも拡げないために三密回避・換気・消毒・手洗い…などをするのであって、感染者が出たときに追跡できるように出欠を管理し、歌っていた場所を記録するわけです。たとえ感染したとしても無症状または軽傷で済むように抵抗力を高めるわけです。そういったことを前提にガイドラインはあるのです。どこで、いつ起きてもおかしくないことです。

大切なことは合唱界や合唱人同士で足の引っ張り合いをしないことです。分断ではなく連帯のはずです。感染した方が重症化しないことをお祈りしています。

感染した方は本当につらい思いをされていることと思います。どうぞ苦しめないでいただきたいです。自宅待機をされている合唱団も苦しめられていることと思います。団員の家族も自宅待機を命ぜられている方も多いかと思われます。

悪いのは、感染者でも、合唱団でも、合唱活動でもありません。コロナウイルスです。

サッカーや野球などの試合が再開されていますが、それにはPCR検査などを行うことで一応安全性を担保することを前提としています。誰でもどこでも簡単に検査が受けられれば状況はかなり違ってくるものと思います。合唱でもそのようなことが出来ると安心して活動しやすくなるのではないのでしょうか。

※PCR検査の是非については見解が分かれています。ここでは詳細には触れませんが、PCR法自体は非常に優れた技術で遺伝学はじめ広い分野で使われています。それを感染症の検査に応用するとなると、そもそも検体採取の良し悪しが結果を大きく左右するので問題になるわけです。正しく検体が採取されているか、その後いくつかの処理を経て測定に掛けられますが、その手技は適切かなど、実際の現場でどこまで確立されているかが重要です。

福島県合唱連盟では、8月29日～30日に郡山市で合唱コンクールを予定しています。出演者にはコンクールの2週間前から起床時体温を記録した「健康チェックシート」の提出を義務付け、出演者が未成年の場合は保護者の「参加同意書」を求めるなど出来る限りの対応をしています。

現時点では県連ホームページではコンクール開催可否についても、クラスター発生についてもとくに発表はありません。いずれ郡山市や福島県合唱連盟などから詳しい説明があると思います。それまでは軽々な発言を控え、どこで、いつ起きてもおかしくない¹と自覚して行動すべきです。

クリーンルームにおける微粒子拡散実験データ公表

待ち望んでいた「**コロナ下の音楽文化を前に進めるプロジェクト**」の実験結果が8月17日リリースされました。クリーンルーム内で楽器や声楽の演奏を行い、発生する微粒子を測定する精密な実験。結果はスライド107枚にも及ぶ「クラシック音楽演奏・鑑賞にともなう飛沫感染リスク検証実験報告書」(PDF)として公表されました。詳細は別の機会に触れますが、まとめを要約すると次のようです。

- ▼クラシック音楽の鑑賞(咳・会話含む)や演奏に伴う飛沫などの微粒子の発生状況を計測した。
- ▼演奏者およびマスク着用下の客席：従来の間隔でも、ソーシャルディスタンスを取った場合と比べて飛沫が上昇することはない。ただし、ホルンでは右側、トランペット・トロンボーンでは前方においてやや多い微粒子が観測された。
- ▼飛沫を介した感染リスクに限らず、人との接触がある限り感染のリスクをゼロにすることはできない。合理的な対策の組合せで感染リスクを下げること、そして感染が生じてでもできるだけ狭い範囲にとどめることは可能である。
- ▼各団体が感染リスクを理解した上でそれを下げる方法を十分に検討し、方針を決定することが望ましい。